

インターバンクの声（2015年6月29日）

今年1月のギリシャ総選挙から約5カ月が過ぎ、ギリシャがユーロ圏に留まるのか、金融支援交渉が決裂して債務不履行、そしてユーロ圏からの離脱となるのか、今週がいよいよ山場になりそうだ。ギリシャの最大野党だった反緊縮派、急進左派連合（SYRIZA）が勝利収めたその日、現在首相となっている当時のチプラス党首は、国際支援団による財政緊縮という「屈辱と苦難の日々は終わった」と表明、今思い起こせば欧州連合（EU）や国際通貨基金（IMF）などの支援団との厳しい交渉の幕開け宣言でもあった。反緊縮の公約を掲げて勝利したとは言え、政権が替わっても一国家としての国際公約が優先されるのが当然のはずだが、ギリシャには「なぜ自分たちだけが辛い思いをしなければいけないのか」との考えが勝っているようだ。ドイツなどの債権者側に見れば、「自分たちが蒔いた種」との認識でギリシャの思考が全く理解できないようだが、それでも支援交渉に長い時間的猶予も与えてきた。ギリシャ議会は、EU側が支援条件に求める財政再建策に対する賛否を問う国民投票を7月5日に実施することを承認したが、EU側は30日までとなっている金融支援の期日延長は拒否している。両者による歩み寄りがなければいよいよ債務不履行が現実のものとなりそうだ。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。